

市民研会員から寄せられた

2022 年 私のおすすめ 3 作品

締め切り 2022 年 1 月 31 日、到着順に掲載

市民科学研究室は毎年年末になると、会員の皆さんから「私のおすすめ 3 作品」という原稿を募集しています。その年に読んだ本（雑誌や漫画も含む）や観た映画や TV 番組、聴いた CD や足を運んだ展覧会やライブなどで、多くの人に勧めたい 3 作品を挙げていただき、それらにコメントを付けてもらう、という企画です。2007 年から始めて、毎年『市民研通信』の原稿とさせていただいています。

●杉野実

1◆11月8日「皆既月食・天王星食同時観察会」（白井市文化センター）

惑星や恒星が月にかくされる星食は、これまでに何度か自力で観察しましたが、今回はかくされる星が暗いので、県内の集団観察会に参加しました。主催者が望遠鏡像を投影してくれましたが、双眼鏡をもっていったので自力でも見るのができ、随分いろいろなことがわかりました。一番意外だったのは、皆既中の赤い月が、双眼鏡ではあわい灰色にみえたことですね。月が明るければ天王星は見えないだろうというのは思ったとおりで、星の位置や食前後の変化までを考えると、やはり会に参加してよかったと思いました。まだ農村のおもかげが残る白井は市川よりもともと空が暗く、双眼鏡で木星や土星の衛星、さらには表面模様らしきものまで確認できたのも、思わぬ収穫だったと思います。

2◆市川市中国分「地域交流スペースえんがわ」と「(3年ぶりの)市川市民まつり」(11月3日)

コロナ禍以来どうも元気がない、市川真間のコミュニティカフェ「アトリエ・ローゼンホルツ」の店主、M.S.さんにかかわるのは結構大変なのです。うちのごく近所にも「交流スペース」ができたので、そこでアトリエでの経験のほか、駄菓子や相撲のことなどを話題にして話しこんだりもしました。ここ数年ずっとオンラインだった市民まつりも大洲防災公園に帰ってきて、「早明法の同窓会がめだつけど、慶歴はないなあ」なんて思わぬ発見をすることができました。とりわけ「市民のまちづくり」をあつかう建築士会のブースでは、「『にぎやかにしたい』くせに『緑もふやせ』とか、みんな勝手なことをいうよなあ」とか考えさせられました。私は「Sさんを元気にしたい」と書いたけど、さて？

3◆ハンス・ライヘンバッハ「合理主義と経験主義」

http://mickindex.sakura.ne.jp/reichenbach/rcb_RaE_jp.html

Gilbert Keith Chesterton Orthodoxy (Hokuseido Press 1983)

「もよおしもの」関係がふたつ続きましたが、最後は哲学関係の論文・書籍の紹介、いやそれらに関する「勉強会」の、みなさんへのおさそいです！まず「論理実証主義者」ライヘンバッハですけど、この人は至極まっとうな唯物論(!?)や実存哲学の批判をしているのですが、おだやかな語り口にもかかわらず、(本意に反して)ごりごりの「科学主義者」みたいにみえてしまうのが、なやましいところです。ブラウン神父の作者でもあるチェスタートンは、穏健なキリスト教徒の立場から合理主義や実証主義を批判していますが、これが意外にも全然カルト的ではなく、ライヘンバッハとの共通性も感じられます。「なぜ常識が信じられるのか」、このふたりの文章を読んで一緒に考えてみませんか？

●吉岡寛二

1◆「ふしぎな中国」(近藤大介、2022/10/20、講談社現代新書)

近藤大介氏の著書を読んだのは初めてです。テレビで何回か見かけていますが、しゃべり方がパッとしないし「親中派」とされていますから、彼の著書には全く興味がありませんでした。久しぶりに梅田の紀伊国屋の新刊書コーナーで見つけたのですが、今までにない切り口だったので、「何か面白い情報があるかも？」と思って購入しました。税別価格で900円と安価だったので、ダメもとのつもりでした。

中国で流行っている言葉のうち、34個の言葉について各6ページで説明をしてあり、どこの部分からでも読めます。マスコミによく出てくる「共同富裕」「戦狼外交」なども含まれていますが、全く知らなかった「学査改」「千年大計」「凡学」「白衛兵」をはじめ、中国国民の目線からの情報なので「へえー。そうなんだ。」という感じです。

近藤氏は、習政権にはかなり辛辣であり、「親中派」というのではなく「超がつく知中派」だと感じました。現代中国を理解する上では、類書がない秀逸な本だと思いますので、おすすめです。

※2018年には、「スッキリ中国論ースジの日本、量の中国」(田中信彦著、2018年、日経BP)を、2019年には、「チャイナスタンダードー世界を席卷する中国式ー」(朝日新聞取材班、2019年、朝日新聞出版)を紹介しています。

2◆「すずめの戸締り」(新海誠監督、2022/11/11 公開)

新海氏のアニメ作品は大好きなので、「私のおすすめ3作品」にいれておきました。

※2016年には「君の名は。」を紹介しています。あれから6年もたつんですね。前作の「天気の子」もとても良かったです。

3◆米国人からみた「米国と日本の言語・社会比較」(ユーチューブ3編)

2019年にユーチューブを始めて紹介しましたが、それに続いて二度目になります。私が見る知識は、今はユーチューブが一番多いです。ニュースでさえ、日テレニュース、テレ東BIZなどは毎日のように

視聴しています。個人のユーチューブはテレビ・雑誌などのマスコミと違って、個人の体験と考え方をもとに意見を述べているだけなので、内容・意見の信頼性が高くありません。しかしながら、いろんな方々の異なった意見を視聴することで、新たな発見があります。また別の観点ですが、一人の動画をたくさん視聴していると、ああこの方はこんな人なんだ、こんな見方をしているのだと、わかってくることもあります。

当初は、前者の例（「日本語が達者」「日本在住歴は10年程度」の韓国人、アメリカ人、ロシア人からみた文化の違い）を紹介するつもりでしたが、韓国、ロシアは時期的にバイアスがかかりやすいので、ためらいがあります。それで、後者の例（アメリカ人の意見）を紹介したいと思います。日本語が日本人よりも達者で洞察も深いので、一見の価値はあると思います。

日本語って実は、英語より簡単！？！？

<https://www.youtube.com/watch?v=1L-8b5O8CmM>

日本 vs アメリカ：人間関係編！

https://www.youtube.com/watch?v=sy-SE_Qze0k

(参考に) 再出発！今更ながら自己紹介

<https://www.youtube.com/watch?v=tnsCldXLlo0&t=15s>

●上村光弘

1◆さかなクン (2016) 『さかなクンの一魚一会：まいにち夢中な人生！』講談社

さかなクンの自叙伝。「ときに挫折をあげつつも、幼いころから大好きだった絵とお魚の力で未来を切り開く！」とある、出版社のうたい文句どおり！ 発達障害のさかなクンが好きなことをつきつめて、2006年、とうとう東京海洋大学の客員准教授になったのは「すぎよい！」の一言だ。さかなクンの「好き」を伸ばしたお母さんはもっとすぎよい！ 「夢中になるものがあると、心の支えになる。夢は言葉にするとかなう気がする」(259ページ) ところに励まされた。本書が原作の映画「さかなのこ」もおもしろかった。

2◆是永淳 (2014) 『絵でわかるプレートテクトニクス：地球進化の謎に挑む』講談社

プレートテクトニクスは大陸が動くという説である。それがイラストで非常にわかりやすく説明されている。そのことと生物の進化とが密接にかかわっているのがなんとなく読み取れそうだと感じたのが、ダイナミックでおもしろかった。

3◆瀬山士郎 (2013) 『なっとくする数学の証明』講談社

数学の証明は3種類しかない。背理法、演繹法、帰納法である。たとえば背理法は素数が無限にあることを証明する。演繹法は図形の証明(たとえば垂線は必ず底辺を二等分する)など。帰納法はnまで証明できるとしたら、n+1でも成り立つことをいう。証明というと、重箱の隅をほじくるようにちまちま

やるというイメージがあるが、数学の証明のおおまかな地図というか全体の見取り図を示してくれているのがいい。

◆番外 「祈り・藤原新也展」(世田谷美術館) 2022.11.26-2023.01.29

<https://www.setagayaartmuseum.or.jp/exhibition/special/detail.php?id=sp00211>

藤原新也の写真は『印度放浪』『メメント・モリ』で見えていたが、ここ数十年見ていなかったの、足を運んだ。この企画展は「公立美術館初の大規模個展」「作家自身の眼で厳選された作品による、「祈り」の壮大な物語」(世田谷美術館の案内による)なので、藤原新也がいままで撮った作品の集大成を見ることができる。作品は写真だけではなく、映像や書もあった。何が出展されていたのかは、世田谷美術館のウェブサイトからPDFでダウンロードできるようになっているし、図録として販売していた藤原新也『祈り』(クレヴィス、2022年)で見ることができる。20代のころ、インドに貧乏旅行をしたことがあるので、インドの写真にはなつかしさを感じた。

市民研の活動に関係がある写真もあった。肖像画の一作品として展示されていた小保方晴子の写真だ。その写真に添えてあった文章(藤原は2014年4月9日の3時間の記者会見に同席し、表情だけを注視していた。その時にテレビのスタッフに求められた感想)に「彼女は嘘をついていないよ。表情を見れば明らかだ。ただ彼女にとって顕微鏡の中がファンタジーの世界であったということは言えるんじゃないかな。そういう意味で彼女は明らかにSTAP細胞を見ていると思う」(『祈り』p.236)とあった。その感想に「そうだろうな」と共感した。

●角田季美枝

1◆柳澤静磨 (2022)『ゴキブリ研究はじめました』イースト・プレス、四六判、192ページ、1,500円+税、ISBN978-4781620954

本書を知ったのは、日経新聞2022年9月17日の書評欄である。大きなゴキブリの模型をかかえて笑っている著者の写真があった。「うひゃー、おもしろい本が出たな」と思って、即、図書館にリクエストをして読んだ。

以前、大学で好きな昆虫嫌いな昆虫を学生のコメントとして書いてもらったことがある。たいがいゴキブリは「嫌いな昆虫第一位」に輝いている。本書の著者もそうだった。虫捕り少年であったにもかかわらず(?)、である。

しかし、磐田市竜洋昆虫自然観察公園に就職してから業務の一環で行った西表島で出会ったゴキブリ(ヒメマルゴキブリ)がダンゴムシのように丸まるのを見て、「もしかしてゴキブリにもいろいろいるのでは」と、興味をもつようになったという。職場で飼育するのはもちろん、毎年ゴキブリの展示をしている(展示のチラシのデザインはかわいく、また、来館者による人気投票をしており非常にユニークだ)。また、2020年には鹿児島大学の教授らの研究チームの一員として、日本で35年ぶりに新種のゴキブリを2種(アカボシルリゴキブリ、ウスオビルリゴキブリ)発見。その後も新種を発見しつづけている。

なぜ大嫌いだったゴキブリの研究にはまってしまったのか、また、新種の発見にはどのような手続き

が必要なのか、専門的な内容にもふれながら、非常にわかりやすくユーモラスな筆で読ませる。これがゴキブリ？というようなきれいなゴキブリの写真もある。

読んでくれば、ゴキブリ嫌いな人を減らすことになると思うのだが、問題はどうかこの本に手を伸ばしてもらえるか、である。2022年度、大学の授業でブックトークを月1回学生にやってもらったが、10月のお題が「動物」だったので、これはチャンスとばかりにパワーポイントを数枚つくって紹介した。「動物でGが出てくるとは思わなかった」と、複数の学生からフィードバックをもらったが、さて、本書を実際に読んでくれただろうか。

なお、件のゴキブリ展、2023年は2月4日～4月6日に開催。足を運んでみたいものだ。

<https://blog.goo.ne.jp/k-musi/e/4a6ef87af8d4df736f1df23ac19f9b0d>

2◆藤原辰史 (2022) 『植物考』 生きのびるブックス、四六判、240 ページ、 2,000 円+税、ISBN978-4-910790-07-7 C0010

たいていの人は、植物を人間より下位の生きものとして位置づけている。食物連鎖をピラミッドで描くこともそれに拍車をかけているのではないか。ヒエラルキーの上のほうが高等というイメージをもちやすいのである。また、最近、草木供養について調べてみて驚いたのが、仏教は植物を生命体とはみなさないということである。

本当に植物は人間より下等なのか。本書の著者は歴史学者で、植物学者でも園芸家でもないが、それに迫って、「そうではない」とする。であれば、読まずにいられまい！

本書の目的というか意図は非常に野心的だ。長くなるが、引用したい。

「私が本書で試みようとしているのは、かつて鉱物や植物や動物の真理を究明することも、演劇や音楽を論じると同様に人文学の営みであった時代を、過去のものにしないことである。別の言い方をすれば、鉱物や植物や動物の真理を究明することが自然科学者だけの営みになった現在の高度分業社会を例外とみなすことである。そうして、人文学の視点から植物とはなにか、植物と人間はこれまでどのような関係にあり、またどのような関係を作りえるのかについて、歴史学や文学や哲学などを横断しつつ、考えたい。」(p.16)

また、あとがきでは以下のようにも書いている。

「学問の世界に専門性が求められることは理解しています。二兎追うものは一兎も得ず、という警句を私は真実だとも思っています。本書も片手間の仕事ととらえられるかもしれません。しかし、そうではありません。20世紀前半の歴史研究に従事する人間が、否が応でも植物について学ばねば先に進めないという「必然」を理解していただきたいと思っています。…私は初めから一兎しか追っていませんし、一兎を追うことしかできません。」(pp.250-251、強調傍線引用者)

植物性、植物の組織、植物と大気、枯葉剤、植物の哲学、植物の芸術、根、花、葉、種、採食主義批判、植物に進化する人類を描いたSFなど、本書で取り上げている話題は多岐にわたるが、アカデミックな内容をおさえて、植物と人間との関係をふりかえっている。といっても学問的な内容ばかりではなく、ところどころに著者の研究室や自宅での「栽培」など日誌的な内容もあり、親近感をもって読むことができた。ただ、定価をおさえなくてはいけないとはいえ、図版がモノクロ印刷なのが残念だ。

本書にて紹介されている書籍の多くに、私は目を通したことがなかった。現在、今後の研究や趣味の

ガイドブックとしても活用している。

3◆川内有緒(2021)『目に見えない白鳥さんとアートを見に行く』集英社インターナショナル、四六判、336 ページ、2,100 円+税、ISBN978-4-7976-7399-9

白鳥さんとは白鳥建二さん。1969 年生まれ。2 歳のときから視覚に障がいをもつようになった。大学生になってから、同級生とつきあって初めてのデートが愛知県立美術館「エリザベス二世女王陛下コレクション レオナルド・ダ・ヴィンチ人体解剖図展」。その時から美術館という空間のとりことなり、「自分は全盲だけど、作品を見たい。誰かにアテンドしてもらいながら作品のことを言葉で教えてほしい。短くてもいいからお願いします」と、気になる美術展を見つけると、自分で電話して出かけて行った。コロナ禍前では年間何十回と美術館に足を運んでいたという。

いまでも視覚に障がいをもつ方が鑑賞することを前提に展示をする美術館（博物館も；ついでに言えば、日本の博物館は法律的には動物園、植物園、水族館も含んでいるので、その意味で使っている）は少ない。作品ないし展示品、展示されている生きものは鑑賞者自ら見ることが前提だからだ。

本書の著者の川内さんはノンフィクション作家。白鳥さんと一緒に初めて美術館に行ったのが 2019 年 2 月の三菱一号美術館での「フィリップス・コレクション展」。以降、2021 年までの白鳥さんと一緒に見た体験をまとめている。一緒に行ってどのような作品なのかを言葉で白鳥さんに伝え、それを聞いた白鳥さんから問いかけがあり、さらにやりとりがつづく。そのやりとりは白鳥さんと川内さんだけではなく、川内さんの友人も一緒のことが多い。いわゆる健常者でも見え方が異なることもその場で共有する（たとえば、ある人は湖と思って見ていた絵を、違う人は草原ととらえていた、など）。

足を運んだのは美術館だけではなく、お寺や芸術祭もあり、作品の時代も作者もさまざまである。白鳥さんと一緒に見るというワークショップの記録もある。白鳥さんは 2021 年、全盲の写真家として作品を発表することにもなったので、その経緯や撮影した写真についても紹介されている。白鳥さんと一緒に見ることを映像記録としてまとめた作品もある。私にはほとんど知らない作品、美術館が多いが、やりとりを読むと、作品の雰囲気が見えてくるのが不思議だ。作品の一部はカラーないしはモノクロの画像がついているが、読んでいくと、平面的に見えなくなってくるのもおもしろい。

「見る」とは、「障がい」とは、だけではなく、「アート」とは、「書く」とは、「記憶」とは、「他者の存在」とは、など、多くのことを、考えさせられる。しかし、そう書くのは私が読者にすぎないからかもしれない。川内さんは本書を締めくくるにあたり、白鳥さんと一緒に見ることをふりかえって、こう記している。「ただ一緒にいて、笑っていらればそれでよかった」(p.320)。

私は博物館の展示に行く時、誰かと一緒に行っても、「あとでね」とそれぞれひとりで見、館を出てからお茶をしながら感想を共有する。誰かとその場で一緒に感想を言語化して共有しながら見るというのは非常に苦手だ。むしろ自分のペースで見たい。しかし、おしゃべりをうるさがられない環境で見るのはむしろ嬉しいだろうが、誰かと一緒に時間や場所を共有することも悪くはないのかな、違う楽しみがあるのかなと思い始めている。

● 橋本 正明

1◆Regeneration Ending the Climate Crisis in One Generation (リジェネレーション 気候危機を今の世代で終わらせる) Paul Hawken 編著 江守正多監訳 五頭美知訳 株式会社山と溪谷社 2022

この本の中に記述があるバイオ炭、先住民族の火災管理手法「良い火」、パトリア・ウェスターフォードによる「樹木による共同体」という新たな生態系概念、etc.……これからの時代を生きるために必要な【古くて新しい技術】や【身近にあった仕組みの革命的発見】がこの本の随所に散りばめられている。写真が多いとはいえ 400 ページを超える情報量は圧巻である。そしてそれ故に読むたびに味が変わる逸品であることは間違いないだろう。

2◆肉食の終わりー非動物性食品システム実現へのロードマップ ジェイシー・リース著 井上太一訳 原書房 2021

この本はそのタイトルが示す通り、有史以来の牧畜の流れを変えてしまうような大きな時代の潮流の変化を現している。数年前からヴィーガンなる言葉を耳にする機会が増えたが、植物由来の代替肉の市場は東南アジアや欧米を中心に急速に技術が進化し、急速に普及している。今や日本でも着実に成長しており、スーパーの陳列棚でも目にするが増えている。単にアニマル・ウェルフェアの観点だけでなく、低炭素社会の実現、資源循環型社会の構築というまた違ったアプローチから、工業型牧畜業に終焉が訪れつつ、この新しい産業がチカラを得ていることを我々は見落としてはならない。そしてそこに日本の新しい農業と牧畜業のカタチが見出せるかも知れない。この本はそんな農業・畜産業の行く末を暗示する書となっていると私には思えるのである。

3◆世界初は「バカ」がつくるー「バカ」の育ち方あります！ 生田 幸士著 さくら舎 2019

私はたまに書店で「本に呼び止められる」ことがある。今回は正確に言うと「呼びかけられた」のであるが、本来買う予定だった書籍そっちのけで手に取り、買ってから一気に読み通してしまった。あまりに面白いので、知人に先日思い切り紹介してしまったほどである。やっぱり、【バカになれる】度胸と胆力がある人間がいつの時代も新しい道を切り拓くのだなあ(笑)
私はそんな【バカ】になれるだろうか…。

●林 浩二

今年も企画展示3点を挙げます。

全世界の博物館・美術館への Covid-19 の影響は 2022 年も続きましたが、徐々に制限が緩和されるようになってきました。年の後半、原稿作成のプレッシャーで遠出の頻度は限られてしまい、見に行けたのは 76 の館・展示でした。

1◆小阪淳個展「響体」両国門天ホール（東京都墨田区）

2022/12/23～12/29 <https://www.monten.jp/20221223e>

朝日新聞論壇時評（毎月最終木曜日に掲載 <https://www.asahi.com/rensai/list.html?id=79>（この記事は有料）の評論に添えられる新作 CG が毎回、面白くて、作家名を検索したところ都内での展覧会開催に気がつき、訪問できました。ビル内の小さなスペースでの短期間の展示です。

作家当人がおられて、偶然に居合わせた都内美術館の学芸員さんと一緒に展示作品を一通り案内いただくことができ、得難い経験でした。

2022 年 11 月 24 日に掲載された作品「被攻撃派」（<https://digital.asahi.com/articles/photo/AS20221124000500.html>）も話題になりました。このころ、欧米で繰り返し起きた、美術館で展示中の作品にジュースをかけたり博物館の展示室内の金属柱に自分の手を接着剤で固定したり等のアピール／売名のためと思われる「攻撃」が相次いだことを下敷きにしていることは明らかです。タイトルは美術の流派名という設定、マルセル・デュシャンの「泉」の便器や的（まど）の存在には気がつきましたが、的の本歌はジャスパー・ジョーンズの「標的」で、下部に並んだ缶は、アンディー・ウォーホルの「キャンベル・スープ」缶を取り込んだところまでは気づいたり読み切れていませんでした。

今回の展示作品の大部分は過去に発表したもので、朝日新聞の紙面の CG、武器がいずれもこちらを向いている CG の大判印刷作品の他、パラメーターを変えることで様々な二次元の風景ができるプログラム、その場で撮影した画像を取り込む仕掛け、ゲーム等様々でした。

作家の小阪淳さん当人からは作品制作の話や AI の発展に注目していることなどを伺いました。ちなみに紙面の CG 最新作は 2023 年 1 月 26 日掲載です。

(<https://digital.asahi.com/articles/photo/AS20230126000181.html>)、何に見えますか？

2◆2022 年度 第 2 回コレクション展 京都国立近代美術館（京都市左京区） 2022/05/19～07/18

<https://www.momak.go.jp/Japanese/collectiongalleryarchive/2022/collectiongallery2022no02.html>

（一部の作品と詳しい説明が出ているのでぜひご参照ください）

構成は西洋近代美術作品選、「没後 50 年 鏑木清方展」によせて、戦争と写真：W. ユージン・スミス《第二次世界大戦》と《スペインの村》、近代工芸の着物の 4 セクションから。

冒頭の西洋美術のピカソの「静物－パレット、燭台、ミノタウロスの頭部」（1938）は、後に反戦を象徴する作品とみられるようになったゲルニカ（1937）の延長にある作品とされています。会期直前の 2 月 24 日にはロシア軍のウクライナ侵攻が始まりました。この社会的情勢を企画に反映させていることに

強い共感を覚えました。

同館は豊富な写真コレクションを有しており、今回のコレクション展ではユージン=スミス作品で構成されています。第二次世界大戦では、サイパン、硫黄島、沖縄での最前線で民間人、特に子どもの様子を記録した作品でした。

コレクション展としてできるだけのことをしていると感じます。これは素晴らしいこと。

3◆日本の鳥の巣と卵 427 大阪市立自然史博物館（大阪市東住吉区） 2022/04/29~06/19 <http://www.mus-nh.city.osaka.jp/tokuten/2022birdnest/>

日本最大の野鳥の巣についての「小海途銀次郎氏コレクション」の標本「すべて」を展示するというチャレンジな展示でした。427 と広報していますが、最終的に数十個増えたとのこと。入口のミサゴの巣の巨大さ、使用している枝の太さなどが迫力でした。

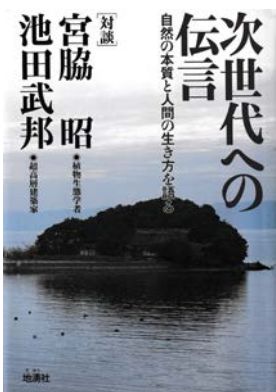
所々にある採集記が楽しかったです。展示解説書は冒頭図版だけカラーで、本文はテキストと図、モノクロという書籍で、この時点での大阪府内の繁殖地点データなど資料的価値は高いものになっています。逆に巣と卵の写真は、同著者（小海途氏と和田岳学芸員）による大阪市立自然史博物館叢書『日本鳥の巣図鑑—小海途銀次郎コレクション』（東海大学出版）に任せています。この分担も上手なやり方と思いました。なお、巣や卵はすべて、この機に同館に寄贈されました。

●谷 敦 @市民研3年生

1◆『次世代への伝言／池田武邦・宮脇昭(対談集)』自然の本質と人間の生き方を語る (地湧社 2011年)

建築家と植物学者という、ちょっと珍しい顔合わせの対談集です。現在ではむしろ宮脇昭の方が名が知られているかもしれません。

建築家池田武邦の名は一般的にはあまり知られていないように思います。とは言え、日本で初の超高層・霞ヶ関ビルをはじめ、新宿副都心に建つ、京王プラザホテル、新宿三井ビルらを次々に設計した人と言え、多くのひとがその建物はご存じだと思います。



超高層ビルの実績があまりに注目されるため、建築界の中でも「超高層ビルの専門家」として扱われてしまうことが多いのが残念なのですが、実は池田武邦は自然環境に関しても、国際協力のあり方にも深い造詣・洞察を持ち活動し続けた建築家で、この対談も彼が長年敬愛してきた宮脇昭氏とハウステンボスで偶然出会うことがきっかけだったようです。

この当時既に80代半ばの老人同士の対談ですが、日本の高度成長期をひた走って来た建築家と植物生態学者の二人が、立場の違いを越えて、自然・環境・歴史・文化・文明・伝統等を語る言葉は示唆に富んでいます。

一昨年、昨年と相次いで旅立たれたお二人の、畑は違うがそれぞれの人生を全うされた人の言葉が散りばめられています。

因みに、この本の表紙には海に浮かぶ半島先の小さな森の樹々とその手前に佇む小さな茅葺き屋根の庵が見られますが、この庵は、現役引退後の池田が設計した自邸で、この対談の場所にもなった「邦久庵」です。

この対談の少し前、2008年頃に作られたNHKのドキュメンタリー「廃墟から超高層ビル、そして…建築家・池田武邦が語る戦後」という番組もなかなかいい番組でしたので蛇足ながら付け加えておきます。

2◆「気候危機待ったなし!」 ムニシパリズムと持続可能な未来 岸本聡子 X 齊藤幸平

杉並区の市民団体(ゼロカーボンシティ杉並の会等)が主催した、杉並区長岸本聡子氏と経済思想家齊藤幸平氏の対談。区民センターで開催され、私はweb参加。



ヨーロッパ各国の環境NGO等で20年近く活動した後、昨年帰国し、「住民思いの杉並区長を作る会」から立候補。区長選で激戦の末、薄氷差で当選して次々に新しい区政を展開している話題の人、岸本聡子。

2年前に『人新世の「資本論」』で脚光を浴びた新進気鋭の経済思想家齊藤幸平の対談。

ムニシパリズム(住民自治)という新しい社会のあり方を、気候変動を切り口に、恐れぬ自治体、くじ引き民主主義、脱成長とグリーンニューディール、コモンなどについて深掘り。市民が主催し主体的に行動する姿に、小さいながら新しい民主主義が生まれる萌芽を見る思いがした。

3◆テレビドキュメンタリー番組 (NHK BSI) 『鬼が弾く 左手のピアニスト 館野泉』

ピアニスト館野泉は今では「左手のピアニスト」として有名だが、私の今まで持っていた繊細でリリカルなピアニスト館野泉のイメージが根底からひっくり返された痛快なドキュメンタリー番組。コロナ禍で演奏の機会を奪われた館野泉が目指したのは、新しくよりアバンギャルドな作品。そして若く才能溢れる音楽家たちとの共演。

作曲家平野の書き上げた新譜「鬼の学校」では拳で鍵盤を叩いたり、激しい即興演奏の部分があたり、まるで山下洋輔を思わせるようなダイナミックでスピード感ある音を響かせる。それでいて、美しいピアノの音にはまったく揺るぎがない。

日本では一人暮らしの彼は、不自由な身体ながら買い物をし、自炊し、黙々と練習を重ね、、、コロナ禍で不要不急なことはまるで不要のように言われる中、音楽はやはり必要なもの、無くてはならないも

のだということ、自らの行動で示し続ける。

現在 86 歳だが、90 歳までの演奏活動はほぼ埋まっていると言う。高齢になっても、障害があっても、さらにコロナ禍の中でも、煮えたぎるマグマを内に秘めた老ピアニストは走り続ける。

音楽好きな人だけでなく、ハンデのある人、病に苦しむ人、高齢で元気の出ない人、、、全ての人への人生の応援歌とも言える番組と思えた。

●山口直樹(北京日本人学術交流会責任者)

1 ◆山本哲士『聖諦の月あかり—思索のかなたに感じているもの情緒資本論への序章』 (文化科学高等研究院出版局 2020)

初期の市民科学研究室には、佐々木賢、松田博公『果てしない教育—教育を超える対話』(北斗出版 1993)などを念頭に置いて教育そのものの過剰を問題にしていたような記憶がある。著者の山本氏にもそうした問題意識を感じる。

私は、著者の山本氏には会ったことがないが、その周辺にいる教育学者には会ったことがある。たとえば、南アの反アパルトヘイト運動の教育学者の楠原彰氏であり、山本氏の師である都立大学の小沢有作氏である。楠原氏からは、「教育学関連では一番の異才」小沢氏からは「山本は企業の幹部を“たぶらかす” ことに力を入れている」などという言葉聞いたことがある。

著者の山本氏で印象深いのは、1975 年にメヒコのイリイチのところに留学していることである。イリイチのいた CIDOC で必死にスペイン語文献に取り組んだという話を書いている。本書では山本氏の学問遍歴が語られているのだが、「情緒的資本論」とあるように学問遍歴のほかにも漫画、映画、音楽、スポーツ、文学、食、研究生産マネジメントなどについて語られている。山本氏がここまで幅広く語っているのは、はじめて読んだ。

『超領域の思考へ—現代プラチック論』(日本エディタースクール出版 1988)以上の幅広さである。漫画に関して言うと宮崎駿、白土三平、手塚治虫、安彦良和、山岸涼子、大友克彦、諸星大二郎、谷口ジロー、井上雄彦、池上遼一、ジョージ秋山、つげ義春、秋竜山、永島慎二、林静一、竹宮恵子、吉田秋生、ちばてつや、上村一夫、勝又進、黒鉄ヒロシ、杉浦茂、さいとうたかおなどの漫画家が文学や学問研究を超えた漫画家として紹介されている。

私は、竹宮恵子氏とは 2013 年頃、北京で会って話すことができた。本書では竹宮氏の『地球へ』を信州大学の授業で採用したら街の本屋から『地球へ』がなくなったエピソードを書いている。スポーツに関しては、「プロフェッショナルの偉大さとわざ」という箇所において山本氏の大洋ホエールズから横浜ベイスターズまでのかかわりが述べられている。

そして、もうひとつここで興味をひかれたのは、山本氏が、1999 年の野球文化学会の立ち上げに関わっていることである。私の中学三年の時の担任の先生が野球文化学会に入っていたので、この学会には関心をもってはいたのだが、こういう関連には気が付かなかった。山本氏は、横浜国大生のころから大洋ホエールズ、横浜ベイスターズのファンのような。

映画に関して、山本氏は任侠映画や西部劇を扱った本があるのだが、「ゴジラの登場は衝撃的だった」

という言葉は私などにはやはり印象に残った。

学問遍歴のところでは、メヒコにやってきた文化人類学者の山口昌男氏と会って「はじめて学問的な話ができる日本人にあったよ」といわれたエピソードを紹介している。私も中国にそういう日本人が少ないので交流の場として北京日本人学術交流会を立ち上げたのだが……。

ただ、山本氏は山口昌男を学者としては認めていないようだ。

一方で山本氏が吉本隆明になぜそこまで傾倒するのは、私などにはわからないところもある。山本氏の父は九州帝国大学を卒業した読書好きの鉱山技師だったそうだ。それもこの書で初めて知った。なお、最後に山本氏は、フーコヤイリイチやブルデューの教育論(あるいは科学論)において意図的な実践行為プラクシスを問うわけではなく、慣習行為プラチックを問うているという指摘を一貫して繰り返し語っているが、その指摘は念頭に置いておきたいと思った。

2◆佐高信『この国の会社のDNA』(日刊ゲンダイ 2022)

著者の佐高信氏にご多忙のなか北京までご足労いただいたのは、2015年11月のことだった。北京空港に迎えに行くのと奥さんも付き添っておられ、タクシーの中では、さっそく“夫婦漫才”が始まるのだった。北京では様々な佐高氏の話聞くことができたのだが、私にとっては佐高夫妻の“夫婦漫才”を聞いたのが、一番の収穫であった。

それにしても、なぜ北京に佐高氏を招いたのか。その理由は、北京大学のなかにあるお菓子会社カルビーの日本講座の基金が、堺屋太一、竹中平蔵といったところを呼んでいたことに私が、違和感を覚えていたところにある。彼らは、“民営化”を旗印にした“公共破壊屋”である。

これに対抗しうる“毒”をもった人としてまず思い浮かんだのは、佐高信氏であった。

上述の状況への対抗措置として北京の中央財経大学で学生たちにおいて「日本の会社と文学」をテーマに講義を行ってもらった。中国人青年たちに「日本の会社を理解することなくして日本社会を理解することはできない」と強調していた佐高氏の姿は、私の脳裏に焼き付いている。

「日本人にとって必要なのはマルクスやウエーバーよりも魯迅である」という佐高氏は、魯迅の批評精神で会社批評を行っている。かつて岩波書店が、『岩波現代産業情報 86』(岩波書店 1986)という本を出した時、「岩波書店は、あまりに会社ファシズムに無防備だ」と批判したのは、佐高氏だった。岩波書店のアキレス腱はおそらくここなのだろう。

本書を一読して思ったのは、やはり会社を語らせたらこの人の右に出るものはいないなということであった。

かつては日本にはソニーやHondaという日本の会社らしからぬ会社があった。ところが2000年代以降に進行したのは、ソニーの松下化でありHondaのトヨタ化であった。

ソニーやHondaが、「日本の普通の会社」になるという退行現象が起こっていたのである。本書ではそれ以外にも様々な会社を取り上げられている。

日本は官尊民卑であるとともに大部分の人が会社員であり、そこから独立した市民の領域が極端に小さい社会である。岸田内閣や経団連の提唱する「新しい資本主義」も「会社本位主義」を不問にした資本主義論であり、どこが「新しい」のかはよくわからない。

そういう状況の中で市民科学を展開していかなければならない者たちの苦勞は、想像を超えるものが

あるだろう。会社から独立した市民の領域を切り拓き広げていかななくてはならないのだから、日本の市民科学者は、会社の動向に無関心であってはならないのである。

日本の会社を考えることは、日本の市民科学を考えることである。

本書にはそのためのヒントがたくさん詰まっている。ご一読をおすすめしたい。

3◆適菜収『日本を腐らせたいかがわしい人たち』(ワニブックス,2022)

私が、注目し愛読しているオサムが、5人いる。それは、哲学者の久野収そしてドイツ文学者の野村修、科学史家の金森修、漫画家の手塚治虫、そして本書の著者、適菜収である。

適菜収は、1975年山梨県生まれの作家、評論家である。ニーチェの代表者『アンチキリスト』の現代訳にした『キリスト教は邪教です!』『ゲーテの警告日本を滅ぼす「B層」の正体』『ニーチェの警告日本を蝕む「B層」の害毒』『ミシマの警告保守を偽装する「B層」の害悪』(以上、講談社+α新書)『日本を駄目にした「B層」の研究』(講談社+α文庫)『安倍でもわかる政治思想入門』『安倍でもわかる保守思想入門』(以上、KKベストセラー)などがある。「本来の保守とは何か」を考えるのには、この人の本を読むのがいいだろう。

私が、適菜収の書に最初に接したのは、北京の日本人でつくっていたに読書会のことだった。一緒にやっている人が、適菜の『日本を駄目にした「B層」の研究』(講談社+α文庫)を紹介したのである。最初見たときは、広告代理店の人の人なのかと思ったのだが、著書でニーチェやゲーテを扱っているのを知り意外に深い人なのかと思った。私は、高校時代マルクスは、ほとんど読んでいなかったが、ニーチェは結構読んでいたので少し近さを感じた。

その後、保守の側の論客だということがわかったのだが、いわゆる日本の保守論壇のなかでもかなり特異な位置にある論客だということが、わかってきた。

2022年7月8日、元総理の安倍晋三が山上容疑者によって銃撃され、死亡した。

2011年の原発事故や2020年以降のコロナのようなパンデミックの時も同様であるが、こうした大きな出来事が起こると危機に乗じて必ずデマゴグが、出てくる。

適菜は、10年ほど前から「安倍政権は、新自由主義者とカルトと政商の複合体だ」と指摘していた、今回の出来事によって国家権力の中核にカルトである統一教会が食い込んでいることがはっきりしてきた。2022年7月8日以降、この問題を矮小化し、隠蔽しようとする者たちが総動員されてきた。

本書は、その「いかがわしい人」たちを記録した本である。

たとえば、この本で紹介されている例をあげよう。

この銃撃事件が起こった時、実業家、タレントの堀江貴文「反省すべきは、ネット上に無数にいたアベガー達だよな。そいつらに犯人は洗脳されていたようなものだ。」と投稿した。

また、評論家の八幡和郎は、池田信夫が運営するサイト『アゴラ』に、「安倍狙撃事件の犯人は、反アベ無罪を煽った空気だ」という記事を寄稿していた。

さらにフジテレビ解説委員の平井文夫は、「私たちが苦しんでいるのは、日本という国が、この社会の空気が、安倍さんを殺してしまったのではないかということなのだ」と述べた。

一見、もっともらしく聞こえるが、これらは根拠のない妄想であった。

実際は、犯人の山上は、冷笑系ネトウヨであった。

また、この事件の直後、7月16日産経新聞は「山上容疑者は、母親が宗教団体に献金を繰り返し、破産した恨みを募らせ、関係があると一方的に思い込み安倍氏を狙ったとみられていた」と報じていた。しかし、実際には「思い込み」ではなく安倍晋三と統一教会がつながっていたのはむしろ「客観的な事実」だった。

さらに事件直後から「民主主義の根幹たる選挙中のテロ行為は、民主主義に対する挑戦だ。断固抗議します」(茂木敏充)とか「暴力による言論の封殺や民主主義への挑戦は絶対に許されるものではない」(馬場伸幸)という言説が出て来た。しかし山上の銃撃は私怨によるものであり、テロではないことを適菜は指摘している。山上の銃撃は、「民主主義への挑戦」でも「暴力による言論の封殺」を目的にしたものでなかったのである。

むしろ民主主義を破壊していたのは、安倍政権のほうだったと適菜は指摘している。

もし、権力者を批判したり揶揄したりすることでテロが発生するというのなら、日本では毎日テロが発生していなければおかしいということになる。

適菜は、本書でこうした問題の歪曲を一つ一つ検証している。具体的には安倍晋三、岸信介、福田赳夫、福田達夫、萩生田光一、菅義偉、岸田文雄、山際大四郎、下村博文、山本朋広、山谷えり子、杉田水脈、金子恵美、ケント・ギルバート、門田隆将、ひろゆき、阿比留瑠比、花田紀凱、三浦瑠麗、高橋洋一などといった人たちの言説が取り上げられている。

私が、本書をすすめるのは、市民あるいは市民科学者は、テレビや新聞やネット番組に頻繁に登場する「いかがわしい人たち」に騙されない目を持つ必要があると思うからである。

●野山 宗一郎

NHK ETV の番組「100分 de 名著」から、ロシアのウクライナ侵攻の年に関連する3冊のテキストをご紹介します(本やHPから引用、要約しています)。

1◆NHK 100分 de 名著「アレクシェーヴィチ 戦争は女の顔をしていない」

沼野恭子 著 (NHK 出版)

第二次世界大戦の「独ソ戦」にソ連側の女性兵士たちの希望や絶望を描いた「証言文学」。戦場でも普通の女性としてありたいとの苦悩や戦後の世間の冷たい目による差別が描かれていて、愛国心を鼓舞するプロパガンダと違った戦争の現実やそれを支える多数の人々の理不尽さを女性の視点から静かに告発する。

2◆NHK 100分 de 名著「ル・ボン 群衆心理」

武田砂鉄 著 (NHK 出版)

フランス革命の頃に社会の中で多数になった群衆を突き動かす群衆心理を分析した書。ヒットラーも愛読したとのこと。トランプの米国やプーチンのロシアだけでなく、日本社会にも共通する。「SNS全

盛時代における民主主義の限界やポピュリズムの問題点を鋭く照らし出している」「単純化」「極論」に覆われた社会にあって「思考し問い続ける力」をどう保っていけばよいかを考える」書。

3◆NHK 100分 de 名著「ジーン・シャープ 独裁体制から民主主義へ」

中見真理 著 (NHK 出版)

表紙に「抑圧に苦しむ人々を自由へと導く希望の書」とあるように、ガンジーに影響を受けたジーン・シャープの「非暴力による抵抗運動」は、ミャンマー、セルビア、リトアニアなどでの運動に影響を与えた。

シャープの見方や考え方は、独裁体制は見かけほど強くない。支えているのは民衆、非暴力でこそ勝算がある、など。

「独裁体制から民主主義へ」の途上にある戦後日本の理不尽な現実、戦争（被ばくなど）や公共事業（公害）により、差別される被害者の救済を求める運動に勇気や力を与える書。「非暴力行動198の方法」も参考になる指針。

●鈴木 綾

1◆ふたごじてんしゃ物語 中原美智子 苦楽堂

著者は1971年、大阪府生まれ。社会福祉士で株式会社ふたごじてんしゃ代表取締役でNPO法人・つなげる代表理事で一般社団法人日本多胎支援協会理事。2003年に長男、10年に双子(次男三男)を出産。小柄な著者は一人で双子を連れのお出かけは赤ちゃん時代は到底無理だった。(赤ちゃん連れのお出かけに必要なグッズの量たるや！それが全部2人前、そもそもベビーが二人！腕2本ではそりゃキビシイ…) やっと双子が1才を過ぎ、長男の時のように、双子を自転車に乗せてあちこちへ出かけようとして、まずは乗せるのにも大変な苦勞。前イスから乗せるか、後ろからか、乗せた子が動けば自転車がアブナイ、待たせている子がどこかへ行かないようにも気遣わないといけない、乗っても前後に同サイズの子が乗った自転車の運転はハンドルを取られ、後ろの子が動けばバランスも崩れる。ついに転倒してしまったとき、著者は決意する。

「二度とこけへん自転車に乗るねん」。その誓いの下、安心して双子とお出かけできる自転車探しが始まった。しかしどこにも売っていない、それならオーダーできないか。片端からこぞどと思う会社に電話をするが、道路交通法を知らないのか、自転車の規制を知らないのか、どこにもないのは作れないからだと怒鳴られてしまう。でも、そうしたら双子の親は、年子の親は、自転車のお出かけをできないのか？ いい風の中、一緒にわくわくお出かけしたい、寝てしまった子を安全に連れ帰りたいと願うのはかなえられないのか？ そんなのおかしい、まさに双子の子育てにこそ、必要な道具なのに、という気持ち著者を突き動かす。法律も会社の論理も何も知らなかったからこそ、突き進むしかなかった。(知っていたらできなかつたかも、とも書かれている) どうしたらほしい自転車が手に入るのか、法律を学び、デザインを考え、力を貸してくれるメーカーを探し…2014年、リヤカーメーカーの力を借りてでき

た MY ふたごじてんしゃで、著者の双子は登園を始める。その間、各地の双子家族・多胎児家族との交流で、この自転車を必要とするのは自分だけではないと確信、16年、株式会社ふたごじてんしゃを設立。自転車製作を引き受けてくれるメーカーも見つかり18年、ふたごじてんしゃ発売開始。同年、多胎育児を支援するNPO法人つなげるを設立。東日本震災後や様々な天災後の避難生活や流通の滞りの中、本当に必要な量の紙おむつやミルクを買っているのに、買い占めと思われる非難された経験のある人が多くいたことも交流からわかった。先輩パパママから情報を得たり、子ども連れでの交流がとてもお互いの力になることもわかった。各地でつながりを持って子育てをしていこうと呼びかける。こうした活動の中、自分の振り返りと展望を求めて神戸親和女子大学通信教育部に学び、社会福祉士となり、17年、卒業。

あとがきに、この道のりは長男との子育てから始まっていたと書かれていたのも共感。長男の時のように、自転車のお出かけの楽しさを双子とも味わいたいという願いを実現していくことは、一人の親の個人的な想いから始まって、人と人のつながりを生み、世の中を動かす力になる。今、著者はご近所の高齢の母が障害のある成人の子を危うい二人乗りの自転車で通院させていることを見かけたことから、また次のチャレンジを始めている。

「…本を読んでもいただければお分かりいただけるとおもいますが、わたしは何も持たざる者でした。ただ、目の前にある変えたい現実におかかって突き進んできたただけでした。たどり着きたいあの場所へ行きたくて、続けてきただけなんだと思います。そして、その意志を持ち続け、行動ができたのは、助けてくれる人たちとの出会いがあったからなんだとおもいます。いまもあなたのなかに、何か種のようなものがあるんじゃないかなって思っています。その種は、きっと誰かの生きやすさにつながったり、人生を楽しめるものになるのではないかと思っています。この本が、双子を抱えるママパパや、何かにトライしてみたいとおもっている人や、自分には何もないんじゃないかと自分を疑ってしまっている人に読んでほしいと思います。(中略)わたしは、『双子や年子でも乗せられる自転車』の日常から、つぎは『人を乗せる文化』を創ります。

中原美智子 株式会社ふたごじてんしゃ 代表取締役 NPO 法人つなげる 代表理事
～ふたごじてんしゃ HP、「ふたごじてんしゃ物語が店頭に並んで思うこと」より～

2◆夜フクロウとドッグフィッシュ

作／ホリー・ゴールドバーグ・スローン 作／メグ・ウォリッツァー 訳／三辺律子 小学館

アメリカ産の10代向け児童文学。ニューヨークに住む12歳の少女エイヴリーに突然届いたメールは、同じく12歳のカリフォルニアに住む少女ベットからだ。

「そっちのお父さんは、うちのお父さんと付き合ってるんだよ」

夏休み、父親同士が心置きなく中国へバイク旅行に出かけるために、それぞれの娘は同じサマーキャンプへ送られる。父たちが娘同士も仲良くなるのを期待していると気づき、二人は怒り、父親同士の結婚を阻止するべく協力することに。サーファーで動物好きのベット(DOGFISH)と読書家で夜更かしのエイヴリー(NIGHT OWL)はお互いを「合わない」と感じていたが、キャンプでの体験がそれぞれの良さを気づかせ、徐々に心通わせていく。父達の思惑とは違うところで娘二人は家族になることを楽しみにし始める。そして全然会ったことのなかったエイヴリーの生みの母(脚本家)とも交流を始め、ベツ

トの祖母ガガも巻き込んで、女同士は強力な絆を育んでいく。そして…。後半の展開は想定外の連続で、最後は、おおお～と思うことに。

この作品は2人の作家がそれぞれの娘の立場でメールのやりとりをしながら物語を進めていったらしい。全文メールや手紙などの書簡体で独特だが、訳文もとても二人の味を出していて訳者：三辺律子さんの名をしっかりと記憶した。父親同士の恋愛関係や、人種やジェンダーにまつわる偏見など、現代の子どもが直面することの多様で根深いことに改めて気づかされる。そして時空を超えてやりとり可能な現代に、その交流の手段が途切れた時、どんなに心許なく、不安になるか…。頼りない父より、たくましいガガおばあちゃんが圧倒的にステキ。願わくば、そのようなバアバになりたいものだ。

3◆誰がために医師はいる 松本俊彦 みすず書房

なかなか手に取りにくいみすず書房の本だったけど（シュツとしているのが好きという方もいるのですが、なんだか活字やら本の体裁やら、私にはとっつきにくい…）内容は実にわかりやすく、読み出したら止まらない本だった。アディクションと関わっている精神科医がとても少ないこと、それはそもそも「患者」自身が求めて治療に来ることが少なく、経過はむずかしくて長いし、絶望的な結果になってしまうことも多いからだろう。でも「薬物依存の本質は快樂よりも苦痛の緩和」「この世にはよい薬物も悪い薬物もなく、あるのは薬物の良い使い方と悪い使い方だけである。悪い使い方をする人は、必ずや薬物とは別に何か困りごとや悩み事を抱えている。」という姿勢で患者と関わっている医師がいてくださることに救われる気がする。誰だって嗜癖を持っている、それが人生の向きを闇に向けてしまうかどうかで足を洗わないといけないのか、まあその程度ならね、なのか。著者にとっての車、カフェイン、誰にだってあるあるでしょう。薬物依存の人が「ダメ。絶対」と言われて救われることはない。生き延びるための「苦痛の緩和」を必要とする人を、どうしたら薬物でなく救えるのだろうか。シラフで現実に直面したらもう死ぬしかない、という人と関わってきた医師の絶望寸前の誠意と希望を感じる本だった。「アディクションの反対はコネクション」とも書かれている。お酒に「弱い」息子とギャンブルに「親和性の高い」夫と暮らしていると、この先は行かないよと思える日々の生活への執着？がつなぎ止めるんだらうと思う。喜びのない生活を生きていくしかなかったら、絶え間なく傷つけられ続けていたら、そこを見ないでいるために薬の力を借りてしまうかもしれない。「人びとを孤立から救い、安心して『誰か』に依存できる社会を作ることこそ、嗜癖障害への最大の治療」と書かれていることが、アディクションまではいかなくても苦しい日々を生きる人にも救いになると思った。でも、「困った」人と直に関わるのは本当にむずかしい。一体何ができると思うことも多い。

それでも袖すり合うも他生の縁、ささやかなコネクションになれたらと願う気持ちは強まった。

●上田昌文

1◆嵐山光三郎『追悼の達人』（新潮文庫、以前は中公文庫 2002年）

私にとって、純粋な息抜きの読書として最も肩が凝らないのは、日本の文芸評論的エッセイかな、という気がする。以前、「日本の文筆家で“笑いの四天王”は米原万里、中島らも、南伸坊、ナンシー関だ」と述べたことがあるが（「2013年 私のおすすめ3作品」）、この4人でも、彼らが繰り出す人物批評が、その批評の対象となっている作者や作品を多少なりとも私が知っている場合には、とりわけにやりとさせられることが多いように思う。同じ感触でこの1、2年楽しませてもらっているのが—100円や200円で買うことになる文庫本の古書に限定されるのは著者にはちょっと申し訳ないが一斎藤美奈子（『読者は踊る—タレント本から聖書まで。話題の本253冊の読み方』『あほらし屋の鐘が鳴る』『文学的商品学』など）、群ようこ（読書エッセイとして秀逸な『鞆に本だけつめこんで』『本は鞆をとびだして』『本棚から猫じゃらし』など）、そしてここで取り上げる嵐山光三郎（『文人悪食』『漂流怪人・きだみのる』など）だ。

『追悼の達人』は“息抜き”というわけにはいかないかもしれない。没年で並べて、明治期の正岡子規から、大正期の漱石を経て、昭和期の芥川から小林秀雄まで、総勢49人の文人（主として小説家、他に編集者、詩人、画家、学者など）の、それぞれの逝去に際して寄せられた弔辞や追悼文を、著者が全部集めてとことん読み込んだ上で、見送る者・見送られる者の双方の関係に照明をあて、新たな人物・文学史とでも呼びたくなるような浩瀚な読み物を作り上げているからだ。一人に一章があてられ、例えば「森鷗外—一切腹を許されなかった軍医」「与謝野晶子—嘘から出た真実」「島崎藤村—狡猾なエゴイストの死」「堀辰雄—逞しき病人」「柳田國男—柳田はなぜ旅に行くか」といった具合だ。日本の近代文学のいずれかの作家や作品に魅了されたことのある人なら、堪えられない面白さを感じる章を必ず見出すだろう。

坪内逍遙がいかに寛大で裏表のない人物だったか、石川啄木が嘘つきの塊のような一面があったこと、高村光太郎の場合のように「死者への評価をアンケートで回収する」というやり方がいかに乱暴なことか（どんな人物をも必ず「非難の対象」とさせてしまうこと）といった数々の指摘、そして随所でなされる、「天寿をまっとうした小説家にいい追悼はなされない」といった胸のすくような断定に、私には唸らされることしきりだった。

読み終わって、「死に際しての自分の姿」「自分の死後の評価」といったものにも思いが及ぶ、いくぶん怖い読書体験になったと言えなくもない。

ユニークな、力のこもった名品と言っていい本だと思う。

2◆フィリップ・ボール『ヒトラーと物理学者たち—科学が国家に仕えるとき』

（池内了+ 小畑史哉 訳、岩波書店 2016年）

2023年の2月から毎月1回のペースで、英国のサイエンスライターであるフィリップ・ボールの作品を1冊か2冊ずつ紹介し、そこで論じられている事柄を、私のこれまでの「市民科学」の活動の経験と摺合わせて考察するというシリーズを始めることにしている。

https://www.shiminkagaku.org/csijlecture_hbworld_2023/

その第 1 回目で取り上げる本が、『ヒトラーと物理学者たち』だ。

米国のマンハッタン計画のこと、あるいは日本の（実現にはほど遠い段階で終わってしまった原爆開発である）「二号研究」のことなら、いくらか詳しく知っている人でも、ヒトラーの第三帝国のもと、そこに属する物理学者たちが原爆開発をどこまですすめることができたのか—できなかったとすればそれは何故なのか—を明快に語れる人は少ないだろう。当寺ドイツは広範な領域での世界最高の科学・技術大国であり、物理学に限ってみてもナチ政権になったからと言って、研究のレベルが直ちに低下したわけではない（アインシュタインをはじめとする、第一級のユダヤ人科学者らが多数、追放・逃亡・亡命を余儀なくされはしたが）。では当時の科学者はヒトラー政権といかに関わり合うことになったのか。じつはそれが一筋縄ではいかないかなり複雑な様相を呈していて、そのことが、戦後の物理学者の戦争責任追及の曖昧化とも絡まって、ドイツの原爆開発の真相をつかまえにくくしているのだ。

本書は、マックス・プランク、ヴェルナー・ハイゼンベルグ、ピーター・デバイの 3 名の行跡を追いながら—非難を免れないような戦中から戦後の種々の言動をも点検しながら—、第一級の物理学者の戦争犯罪への加担がいかになされていったのかを明らかにする。

圧巻は、ハイゼンベルグやヴァイツゼッカー（後に弟がドイツ大統領となっている）が戦後になした、なんとも尊大な、自己正当化のための事実の捻じ曲げを、証拠となる文書を突きつけながら厳しく批判しているところであろう。

第二次大戦後も世界から戦禍はとだえることはなく、独裁的な政治体制下にある国も依然として少なくない。兵器開発をはじめ、国家の政治目的に奉仕する（組み込まれた）科学者・技術者は、むしろ今後一層増えてくるのではないか。過去の歴史を掘り返している本書が、現在を問うものとなっているのはまさにそうした状況があるからだ。

およそ「科学と社会」の核心的問題—科学と国家権力の関係や科学者の社会的責任の問題—を深く考えてみたい人なら、本書のような広範な二次資料をふまえて、説得力のある鋭い倫理的問題提起にまで練り上げた論考を、読まないですますわけにはいかないだろう。

3◆ナクソス・ミュージック・ライブラリー (NML)

<https://ml.naxos.jp/>

クラシック音楽を聴いて楽しむその楽しみ方を、様々に試してみたい方に、おすすめの有料サイト。自分専用の「プレイリスト」で、自由にフォルダを作って、CD タイトルや曲名を好きなように分類して登録しさえすれば、まったく独自の「曲の本棚」が出来上がる。これはネットを使った新しい音楽の楽しみ方、と言えるのではないだろうか。

私事を述べて申し訳ないが、2022 年末に 20 余年にもわたって愛聴してきた衛星放送による音楽配信「ミュージックバード」の契約（私が聴いていたチャンネルは「Classic 7」とその後の「The Classic」）を打ち切ることになった。これまでの番組枠が一挙に改編されて、「番組」と言えそうな枠はほぼ全部なくなり、こまぎれで脈絡のない「クラシックの名曲」からの選曲と過去の番組の再放送だけで埋め尽くされる、というひどい改編がなされた。もしこんなことを NHK が行ったら、暴動が起きるレベルだろう。予告もほとんどなく、しかも改編の理由説明は一切ない。電話で問い質したが、「いろいろ事情がござい

まして…」としか言わない。高価な専用チューナー（10万円）と専用のパラボラアンテナ（数万円）の下取りもしてもらえない（結局「ジモティー」を通じて欲しい人にタダであげた）。クラシック音楽の新譜などを高音質で楽しめたからこそ、この衛星放送に年間3万円という、決して安くはない料金を支払ってきたわけだが、リスナーを裏切るようなこのやり方は納得がいかない。おそらく私のように「これはひどい」と感じて契約を打ち切った人が大多数だと思われる。

上記契約料を大きく超えるような金額を、クラシック音楽の音源を手に入れる（あるいはコンサートなどにでかける）ことにあてられない経済状況なので、「どうしたものか…」と悩んだが一次々に出るクラシックの新譜のうち、聴いてみたいと思えるものやはりそれなりにあるので、以前から気になっていた「ナクソス・ミュージック・ライブラリー」（NML）を月額2000円で利用することに決めた。

私のように、すでにかかなりの数の音源を個人的に所有している者にとっては一私の場合はそのほとんどをPCにファイルとして収めている—このライブラリーの網羅性が非常にありがたい。つまり、「知らない曲（あるいは演奏家）」「（名前は聞いたことがあるが）初めて聴く曲（あるいは演奏家）」を試しにちょっとだけ聴いて、それが面白そうなら、自分の「プレイリスト」にデータを保管して後からじっくり聴けるからだ。このライブラリーの「作曲家」「演奏家」のリストは、いかなる大音楽事典をも凌ぐものすごい規模だから、登録されていない曲を探すのがむしろ難しいと言えるだろう。もちろんこのライブラリーへの音源提供を行っていない（ナクソスと契約していない）レーベルも数多くあるけれど—残念ながら日本のレーベルの多くはそうであるようだ—、それが大きな不満になることはないだろうと思われる。

利用し始めて1ヶ月足らずだが、初めて出会って「これはいい！」と思って、次のようなフォルダを作って曲を収めた—その例を3つだけ紹介しておく。（30秒間の試聴が無料でできます。）

・「爽やかな小品集」フォルダから

田中カレン：こどものためのピアノ小品集 「愛は風にのって」仲道祐子（ピアノ）

<https://ml.naxos.jp/album/OVCT-00175>

ピアノが少しでも弾ける人なら「こんな曲をこんなふうになんか弾いてみたいな」と思わせる曲集。「田中カレンさんは三善晃のお弟子さんかな？」と思ったら、まさにドンピシャだった。

・「気になる声楽家」フォルダから

グローヴェン：歌曲集

<https://ml.naxos.jp/album/7090020182001>

クヴェルンダック：歌曲集

<https://ml.naxos.jp/album/7090020182421>

ともにノルウェー出身のマリアンネ・ベアーテ・シェラン（Marianne Beate Kielland、マリアンネ・ベアーテ・キーラントとも読むらしい、どっち？）というメゾ・ソプラノとニルス・モッテンセン（Nils Mortensen）というピアニストが組んで、ノルウェーの近代の作曲家の歌曲を掘り起こして（？）CD化をすすめているとのこと。私は演奏者も作曲家もまったく知らなかった。歌詞がわからなくてこれでは曲を鑑賞したとはまったく言えないのだが、演奏もさることながら、曲も非常に素晴らしいのではな

いか、という予感がする。ああ、英訳でもいいから早く歌詞が知りたい。

・「〇〇の全作品を聴く」フォルダから

私が敬愛してやまない、20 世紀の作曲家の一人、尹伊桑（ユン・イサン）。彼の全作品を聴こうと長年努めてきたが、廃盤になった CD も多く、思うに任せなかった。NML のリストを見ると、9 割ほどはリストアップされているように思える。CD 化されたものがすべて聴けるわけではないが、それでもこれは非常にありがたい。尹伊桑の曲で私が最も好きなものの一つ、「[ハープと弦楽のためのゴンファー（箜篌）](#)」が、私が親しんできたカメラータ・トウキョウの CD（ハインツ・ホリガー & ウルスラ・ホリガー夫妻らの演奏）とは違った演奏で楽しめる。嬉しい。

<https://ml.naxos.jp/album/8.557938>